

報告要旨 「幕府造営の御殿の構造と装飾 —彫物を中心に—」

伊東 龍一（熊本大学教授）

まず、はじめに、私がどうしてここに立っているのかということをお話します。元々私は、平井先生の研究室の出身で、平井先生のところで勉強させていただいていました。最初は、江戸城のことを勉強していたわけではなく、江戸時代の神社やお寺の彫物というか、彫刻装飾（彫物）を勉強していました。そして、ある程度勉強していったところで、平井先生から「江戸城の図面を整理してみませんか」と言われて、図面を整理させていただいたのが最初のきっかけです。その後、江戸城障壁画の小下絵の特別展が東京国立博物館で行われたときに、模型を作らせていただきました。ということで、江戸城であれば、それも、今まで勉強してきた彫刻装飾である彫物を中心に、ということであれば、少しはお話できるかも知れないと考えた次第です。本日は、それに金沢城の御殿について勉強したことも、若干合わせてお話させていただこうと、ここに立たせていただいております。

【構造と装飾】

建築というのは、構造や装飾、工芸といった、全てがあって建築になるのです。まず、江戸城の構造をみます。^{にもちばしら}荷持柱という柱を使った独特な構造です。普通の柱よりも太い柱を使い、その柱の上の建物の荷重を集中的に負担させて、そのほかの細い柱はそれほど頑張らなくてもいい、細いままでいい、という構造だと考えています。万延度江戸城「御座の間」（1860年）の建物の図面には所々に赤いラインがついていますが、これが荷持柱の立つところです。

万治2年（1659）の御殿の大広間の図面で、大広間東側と書いてあるところには、柱の情報が記されています。「惣柱七寸八分角」と書いてあります。基本的に柱は全て“七寸八分”ということです。それから「御正面外側柱八寸三分」とあります。外回り八寸三分の、少し太い柱を使っているということです。「背持柱壹尺」というのは、荷持柱と同じ意味だと思いますが、30cmを超える太さの柱があるということです。万治という早い時期から、江戸城では荷持柱が使われていることが分かります。

荷持柱の構造を分かりやすくするために、立体的に示してあります。これは「御座の間」ですが、赤い柱が荷持柱で、間に入ってくる紫色の柱が細い柱になります。赤い柱に荷重を負担させ、その代わりに間には柱を省略したり、細い柱を立てます。

大広間は江戸城内で一番大きい建物です。土台の上に荷持柱が立ち、部屋の四隅に立っています。部屋の四隅に太い柱を立て、それで建物を支えるという構造ですから、部屋の真ん中あたりにくる柱は細くてもいいことになります。その周りに外側の柱を立て、これに梁がかかってくるわけです。

このような構造を持った建物には、江戸城の西丸御殿、本丸御殿、二条城そして名古屋城の御殿などがあります。幕府の主要な、特に大きい御殿はこのような構造を持っていたのです。

こういった御殿には、「木割り」といって、柱と柱の間隔、それに対する柱の太さ、柱と柱を横につなぐ長押の寸法、それが柱に取り付く高さといった各部の寸法のプロポーションについてのルールがありました。室内デザインとして美しいプロポーション（木割り）は、中世を通じて形成されてきています。対面のための御殿が極めて巨大になったとき、柱も構造上太くする必要が生じますが、それ



では美的に耐えられないという感覚が、当時の日本人にあったのではないかという気がします。そのときに荷持柱を使えば、比較的目立たない部屋の隅の柱を太くし、部屋の中ほどに立つ柱は細くして、大きな御殿でも美しい木割を保つことが出来たわけです。

また、荷持柱の存在する理由には障壁画との関連もあるのではないかと考えました。弘化度の江戸城本丸御殿については、障壁画を描く際に、予めどこにどのような絵を描くかを縮小して描いた下絵（小下絵）が残されていますが、このうちの大広間二の間の小下絵を使って、障壁画と柱との関係を調べてみました。壁や襖に描かれる障壁画は、江戸城では柱やそれを繋ぐ長押を越えて一繋ぎりの絵として描かれます。二の間では大きな松が天井下まで立ち上がり、枝もいくつもの柱を越えて伸びています。しかし、この柱が太くなってしまったら、絵は分断されてしまい、一繋ぎりの絵に見えなくなってしまうのではないのでしょうか。当時の建築では、柱が太くなると長押も太くなるというのが木割のルールでしたから、柱が太くなると太い長押で障壁画は上下にも分断されてしまいます。ここでお目にかけている図は、研究室の学生に作ってもらったものですが、柱と柱の間の間隔が七尺八寸で、柱太さが七寸八分です。しかし、柱を少し太くして八寸五分にすると、障壁画はバラバラに見えてきます。このように建物の構造と装飾（障壁画）は、別物ではなくて密接な関連があるといえます。

それでは次に、彫物について見てまいりましょう。

【二条城の彫物】

二条城の二丸御殿ですが、どこも幕府の御殿は似たようなところがあり、遠侍、式台、大広間、黒書院、白書院というように並んでいます。

建物内部では、欄間には、全面彫刻の欄間のところと、真ん中にだけ彫物が入った欄間（飛入欄間）のところがあります。外部では、屋根の三角になったところの真下に懸魚^{げぎょ}があります。懸魚には鰭^{ひれ}がついており、鰭も彫物です。これらは彫物大工とよばれる工匠が担当します。

【大坂城の彫物】

大坂城に関しては本物が残っていないので、図面が頼りです。図で、点線のところに欄間があり、その欄間には彫物が入っています。大坂城でも真ん中に彫物を入れる二条城と同じタイプの欄間を入れていることがうかがえます。内部には、やはり全面彫物とするタイプの欄間もあります。

具体的にどのような彫刻だったのかというと、それは、弘化(1844~48)の時代に描かれたことが分かっている国立国会図書館にある『御本丸御欄間仕本帳』で分かります。

図柄も、二条城と大坂城は非常に似通っています。大坂城の史料は、江戸時代末期の修理時のものですが、江戸の初めに作られたものが幕末まで残っていたのでしょう。

【江戸城の彫物】

江戸城では、万延度本丸御殿の彫物のことが少し詳しく分かります。しかし、具体的な図柄が分かりませんので、二条城のものや、大坂城のものを参考に考えていかなければなりません。

彫物には、例えば懸魚があります。先ほど話しました屋根を飾る彫物の一つです。台所には欄間があります。図面に丸い円が描かれており、そこに「犀の彫物」と書いてあります。また、その彫物だけを描いた図面もありますが、そこには「浪二犀」と書いてあります。犀は、想像上の動物です。

彫刻の装飾、彫物には、こういった犀や龍、獏といった想像上の動物がよく登場します。

これは、万延元年(1860)の大広間の模型です。上段、中段、下段のところで、直角にコルクの入っているところが彫物です。どのような彫刻が入っているのか分からなかったのも、このときはコルクを入れて、彫物の欄間らしい雰囲気をつくるしかありませんでした。

万延の、すなわち江戸時代ももう終わろうとする時期の江戸城本丸御殿大広間では、欄間が彫物欄

間となっていました。万治という時代、すなわち17世紀中頃に造営された江戸城本丸御殿の大広間では、外回りは、彫物欄間ではなく木格子でした。それが変わったのは、1844年、弘化二年に完成した御殿からでした。外回りの欄間に、新規に彫物を入れるという記録があります。万治のときになかったところに、弘化のときに彫物を入れたことが分かる訳です。

では、万治の前の寛永という時代に造られた江戸城、江戸初期の江戸城の御殿はどうであったかという、同じ場所に、もしかすると彫物が入っていたかもしれません。大坂城で入っていて、二条城でも現状を見る限り、入っているの、江戸城で入っていてもおかしくはないのです。万治のときにどうして無くなったのかということも問題ですが、とにかく、一旦、無くなってしまったのだらうと考えています。

ですから、江戸城本丸御殿大広間の南側の外回りに彫物欄間が入っているのは、弘化度、そして万延度と、江戸の終わりの二つ御殿であって、その前の万治度の御殿には無く、さらに前の寛永度の御殿にはあった可能性があるということになります。

また、江戸城に、本丸の他に、西丸の御殿があります。大広間の上段、下段の少し南側に、彫物を入れていることが分かってきました。江戸の終わりの、嘉永(1848~53)ぐらいのものではないかと考えています。

江戸城本丸御殿の大広間の彫物欄間について、寛永度、万治度、弘化度、万延度の各時代ごとに整理しました。万治度、弘化度、万延度の各時代は中段・下段境は「松に鶴」という題材が共通しています。次に、下段の間・二の間境は「桐に鳳凰」という題材で、二の間・三の間境でも、「唐松に錦鶏」という題材で共通しています。万治度、弘化度、万延度の時代の御殿では、彫るものは共通していることが分かります。ただ、弘化度に特異なところもあります。周りは「亀甲高彫」と書いてあり、カメノコ型に文様を彫ります。真ん中は「桐に鳳凰」で、周囲は亀甲型にラインを彫るという彫り方です。同じように二の間・三の間境を見ると、周りは「花形の彫」と書いてあります。ですから、真ん中に主要な題材を置いて、周りを幾何学的な文様で埋めるという欄間だったのではないかと考えますが、具体的には分かりません。

大広間ではないのですが、万延度の御殿の玄関には^{かえるまた}墓股に亀を入れています。大広間に取り付く^{かごだい}駕籠台の部分では、^{たばさみ}手挟に「^{びしゃもんきっこうじもんぼり}毘沙門亀甲地紋彫」という、地紋彫を施しています。また、組物と組物の間の^{あさばじもんぼり}高さには、「麻葉地紋彫」という地紋彫で埋めています。

ここで地紋彫という言葉ができました。それから、お示した表によれば、^{けやき}櫨材を使っているという様子も分かってきました。地紋彫というのは、神社やお寺だと幾何学的な文様、長押の場合は、連続文様を彫っていくことを言います。

櫨材についてみると、面白いことが分かります。櫨を使ったときはそこに色を塗らないのです。わざわざ櫨を使うということは、櫨の木目がきれいだからであり、そこには色は使いません。同じ欄間でも色を使った(彩色をした)欄間と、色を使わない彫物があるのです。

このような彫物を彫った人・彫物大工について少し紹介しておきます。江戸城や大坂城・二条城などの江戸幕府工事では彫物大工棟梁の和泉家が関与していました。幕府の彫物大工棟梁は、日光東照宮であるとか、歴代将軍を祀る霊廟の建物の彫物も彫っています。また、寛永寺や増上寺の本堂をはじめとする諸堂の彫物も、彫物大工が担当します。

幕府の彫物大工の棟梁が関わった建物に、徳川家歴代将軍の霊廟があります。霊廟は、柱に龍が巻きつくなど彫物が多用され、最高の技法も用いられていました。これらの霊廟は戦災で焼失してしまいましたが、戦前の写真からおおよその姿を知ることが出来ます。

私は、失われた歴代将軍の霊廟建築を図面などから掘りおこしてきました。増上寺の2代将軍秀忠の廟、寛永寺の5代将軍綱吉の廟と、江戸城内にもある綱吉の廟を比較すると、本殿の屋根の形は、江戸城外のものは入母屋造ですが、江戸城内紅葉山のものはトンガリ帽子状の方形屋根になっています。屋根の形をみても若干、城内のものは城外のものに比べると簡略化されていますが、簡略化された城内の徳川家霊廟に、地紋彫が多用されています。本当の彫刻に対して、少し簡略化した彫物という位置づけが、地紋彫にあったという気がしています。また、霊廟を古いものから新しいものへと時代をたどりながら見てゆくと、やや簡略形の地紋彫が増加してゆく傾向があるように思われます。

【金沢城の彫物】

ようやく金沢城の御殿の彫物にたどり着きました。まず、現存する成翼閣^{せいよくかく}には、立派な色のついた欄間が入っています。

次に、現存していませんが、文化度の二丸御殿の彫物を、『御造営方日並記』から拾い出して、整理してみました。表向きの竹の間には、「獅子に牡丹」の欄間が入っています。表式台のところには、「唐破風下壁 波に犀」とあります。入口には、唐破風という屋根がかかっていますが、屋根の下部分の壁に、「波二犀」の彫物があったことも記されています。玄関には藁股の脇に、「波」を彫っているとも出てまいります。奥書院には、「亀・花・岩」の欄間がありました。表の能舞台には、欄間に「鶴」があり、舞台に鶴を彫る点で江戸城と共通しています。奥の能舞台には、三方に、「雲・水・龍」がありました。対面所には、「波に菊」の欄間が入ります。どこの居間か確定できませんが、「波に兎」という欄間もあります。「波」に因んだ題材が多いところに、「火伏せ」の意味もあったのかもしれませんが。懸魚には「菊水」が彫られます。これも江戸城と共通します。

表向きの欄間は、全て彩色とわざわざ書いています。このことは、奥向きの方はそうでもないところがあるのかもしれないということです。もう少し、しっかりと『御造営方日並記』を読み込んでみる、他の記録も読んでみる必要があると考えています。

いずれにしても、金沢城の御殿の彫物にも、江戸城をはじめとする幕府の御殿との共通する部分があることが見えてまいりました。

【神社の彫物】

最後は、寺社の彫物についても触れておきます。熊本県人吉市にある国宝「青井阿蘇神社」は、江戸初期にできた古い神社ですが、彫物に人物、霊獣、一般の動物、花鳥などを彫っています。霊獣というのは特に、龍、鳳凰、獅子などで、これを多く使うところが御殿と違うところかもしれません。幣殿といわれる部分では、小壁の部分に春夏秋冬にちなんだ題材の彫物があります。冬には「椿」、春には「桜」という当たり前の題材で、東西南北の方位と対応させるように彫られています。一方、表から奥の本殿に向かって一直線上の正面の位置には、迦陵頻伽^{がりょうびんが}などの人物の彫物を入れています。

先ほど絵が柱を跨いで伸びる、つながる、分断されるという話をしましたが、青井阿蘇神社幣殿でも、柱の左右で彫物がつながっています。例えば右の水草の茎が柱の左にそのまま伸びていっています。江戸初期、それも慶長という時代にこういうことをするだろうかと、やや心配にもなるくらい、时期的には極めて早い例だと考えています。青井阿蘇神社よりも新しい、あの日光東照宮にも無いやり方なのです。

江戸の終わりになると、埼玉県の川越にある「氷川神社」のように白木で、しかも櫓の建物が現れます。全面を彫刻で埋め、柱、長押は地紋彫を施しています。

彫物の技法の点でみると、そのやり方や時代的な変遷は、寺社建築もお城の御殿も当たり前ですが共通しています。御殿だけでは分からないことも、寺社建築も見ると分かるということもあるのです。